

戦後復興した民間私塾「心学明誠舎」の通史
—生涯学習の視点から心学活動における「都講」に焦点をあてて—

中尾 敦子

History of the private school, "Shingaku meiseisha" revived after
the World war
; Focus on " TOKOU " in Shingaku activity from the angle of
the lifelong education

NAKAO, Atsuko

はじめに

江戸期に誕生した心学思想を活動の核に学習機会を提供してきた「心学講舎明誠舎」¹が、私塾として 280 年も継続して、生涯学習の私塾として活動をしてきた歴史的経緯や、心学についてのいくつかの先行研究は思想史や教育史の分野としては既に語りつくされたと言われて久しい。しかしながら、心学講舎は各地の表舞台でも、巷間の小さな場所でも多様な地域活動の歴史を残してきた。心学講舎は、統治者の処遇に影響にされたが、心学講舎活動はどの時代にも継続され、日本人の日常的習慣、人生哲学に大きく影響を与えてきた。すでに、語りつくされてきたといわれるが、今日その痕跡を日常の暮らしの中で多方面において多様な形で出会う事²がある。心学講舎が社会の変遷のなかで存在し続けたのは、どのような活動を展開してきたのであろうか。本稿では、講舎と活動を支えた人々を主軸に、現代社会における（昭和・平成）講舎通史を俯瞰してみたい。

明治維新を迎えた時、新国家の教育改革においては社会教育としての「心学」はそれまでの地位を奪われ、明治末年まで宗教の一部と位置付けられて宗務局の所管するところに位置した。しかしながらその間も、町の片隅の人々の生活の中で「心学講舎活動」や「心学道話」は引き継がれ、心学からの学びに影響された哲学や思想はひそやかに、各地、各分野で種火が燃え続けるように、人々の体内や心の中に残され、町の姿を語る記録がいくつもの書物に残され見つけ出すことが多々ある³。堺屋太一⁴は「日本を作った 12 人」などの著で、石田梅岩を庶民の知恵として石門心学を興ったとし、心学は日本人が創りだした独創性豊かな哲学であると紹介し、松下幸之助、稲森和夫など日本を代表する企業界の著名人たちも自己の経営理念を語る時に、日本的経営思想の根幹として心学が存在し、梅岩の思想に影響されたことなどをふれてきた。このように、「石田梅岩」が日本的経営思想の寵児として、現在も話題の核になっている事に出会う機会は経済界では稀ではない。昨今は国内や東アジア近隣諸国だけでなく、アフリカのノーベル平和賞を受賞したワンガリ・マータイが「もったいない」という日本語に感銘を受け、その精神を広めたいとインタビューなどで語る姿が世界的な注目を引いた例も見受けられる。本稿では、太平洋戦争終了の 1945 年以後から「心学」が大阪でどのように継承されたのか、講舎活動に焦点を当て、筆者が関わる心学講舎「心学明誠舎」の活動に特化し、地域で心学が語り繋がれ、実生活に

繋がる思想として拡がり、市民生活とどのように結びついてきたのかを、「学びの場」提供者「講舎」からの視座でその推移をまとめることを試みた。筆者は 30 年前に偶然の事で「明誠舎」と深くかかわりを持つ状況になり、心学の世界を探索していく事にはまり込んでいった。先人の活動を整理、記録することから始まり、心学が時代に沿って社会で果たした役割を読み解き、語り継いでいく事、その中で時代に即したものを見つけだしたいと、有形・無形の歴史遺産のバトンを紐解くことにした。そこで、講舎活動の果たす役割と課題について模索することを試み、歴史や研究書に表出する人々だけでなく、市井の多くの手に助けられこの世界に存在した筆者が記録をまとめ、先人の活動に光を当て埋もれた歴史を残すための試みとして表題に記した明誠舎通史として残すことができれば幸いである。1945 年以後の大阪心学活動の拠点で、「社団法人心学明誠舎」を主軸に心学が語り繋がれ、市民の日常生活、特に経済界と繋がり深い思想として拡がっている様子を俯瞰し、民間私塾の継承手法や、社会的役割について考察する。

第 1 章 心学明誠舎（心学講舎）のはじまりから終戦まで（～1945 年まで）

表題とする都講の一般的な言語説明は、私塾などの塾生の中で優秀なものが後輩の指導に当たる事とされるが、心学講舎では、家業に余裕をもった者が講舎に対し資金援助だけでなく、維持運営に深くかかわるものとされ、心学明誠舎 280 年の歴史を紡いだのは多種多様な立場の都講たちの力であったと推察される。石田梅岩はじめ梅岩没後の心学者については、先行研究で論じ語られているが、それぞれの地域において、学者たちと地域庶民の間にたち、その結びつきを作り出し、商い(暮らし)と学びの両立をめざし、生涯学習施設としての講舎の維持に尽くした人々都講についてはあまり知られていない。山中浩之は明誠舎都講であった丹波屋の歴史などに詳しく、先行研究だけでなく心学講舎関係特別展解説書⁵にもその一人である丹波屋七兵衛家(由良氏)と明誠舎との関係を詳しく紹介している。「心学明誠舎は維新後も大坂で、丹波屋を中心に資金援助が続けられたので廃絶を逃れ存続した事、その後岡本市郎兵衛に丹波屋から梅岩遺筆などの明誠舎蔵品が委ねられた事」など紹介されている。本稿は、明治 38 年頃から現在までの心学明誠舎の維持発展に尽くした人々都講に焦点を当て「明誠舎沿革略」を補完する心学明誠舎通史を兼ねてまとめた。

第 1 節 誕生から明治維新まで

享保の時代に始まった心学は各地で、心学者だけでなく心学を学ぶ場所として多くの講舎を造った。心学思想を形骸化しながらも封建体制を破壊しないで、階級社会の中で支配階級である武士と商人を対等と意味づけしながらも、半面では階級社会の固定化という保守思想も固守しながら拡散していった。梅岩の初期思想の伝承からは少し距離を置きながらも、江戸時代の庶民の思想形成を担う講舎が各地に誕生し、そこには都講とされた商人たちが存在し活動を支えてきた。これらの人々の活動については、各地に残る古文書や家法などからの研究がされ、都講についてではなく家訓や家法⁶についての先行研究が残されている。

第2節 明治維新から第二次世界大戦後（1945 年）まで

明治維新を迎え心学はその勢い、影響力を失ったといわれてきた。

明治から大正、昭和へと幾人もの都講たちが社会貢献活動の基盤を築いた事については「山田俊卿伝」⁷に明らかである。船場の街中で、舎屋を拡げ、そこを基点にさまざまな形式の学習機会が提供された。当時は、舎屋だけでなく舎員の自宅でも道話などを行い、その盛況ぶりは江戸時代までには至らなかったが、組織を不動のものにするためのいくつもの活動が重ねられ、その痕跡を大阪市内で見つける事ができる。

時代が進み、戦火が日本の国土まで及ぶ頃（昭和 18 年:1943 年）からは、活動は下火になった。昭和 20 年(1945 年)大阪大空襲で舎屋を失うだけでなく、後ろ盾になった都講である商人たちは離散し、法人格のみを残し、空洞期を迎えることになり講舎の歴史はここで一時休止となる。定款などを含め多くの書類などを 5 月の空襲などで焼失し、戦前から舎の財政を負担してきた豊田家一統も罹災し、余裕を失い都講たちは行方不明となった。

第2章 世界大戦を越え、復興の町で再興される心学講舎と活動(戦後第1期)

明治から大正にかけて衰退を免れた明誠舎は中核になる都講が変わりながら、浪速の街に根づいていた。1945 年の大阪大空襲による壊滅的な打撃で、舎屋だけでなく、理事長は行方不明、豊田家一族も罹災し余裕を失い、舎員の大半が罹災、死亡し、明治 38 年に取得した法人格を残すだけであった。

戦後第 1 期の講舎活動としての例会演題や講師名などは、第一回から 200 回までは「明誠舎沿革略」⁸に所収、281 回から 298 回までは竹中私家本「明誠舎例会記録」⁹に記録される。当時は、講舎における都講役割は、財政的担い手は企業に委ねられ、心学者かつ普及者という 2 足の草鞋をはいての講舎活動と維持活動の任を竹中が一人で担ったと管見される。これ以後に登場する明誠舎都講は役割を分業化していくのとは異にしており、研究者イコール心学思想を維持普及する者という時代の終焉でもあったと考えられる。

では、講舎は終戦前後の混乱にのまれることなく家族の移動と共に歩いていたのであろうか？大戦以後は、この明誠舎蔵品などは竹中靖一の転宅に伴い動いたと推察される。戦後も竹中靖一¹⁰の転職、転勤に伴い、これらの遺品は携えられて旅を重ねたと考えられる。このように長期間、明誠舎蔵品の竹中靖一との同居が終えるのは、病臥に倒れ筆者と同居を始めた 1984 年（昭和 59 年）になった時からであった。筆者が同居を始め、数年間は自宅屋上の倉庫におさめられ、それからレンタルルームへと明誠舎蔵品の長い旅路はまだまだ続いていくのであった。現在、これらの法人蔵品は、山中浩之元理事らの協力を得て、明誠舎目録として整理され、山田俊卿蔵書とともに空調装置のある民間美術館「辰野ひらのまちギャラリー」に収蔵されそこに眠る。このような有形遺産は、歴史遺産の公益性や研究のために、今後どこに到着点を定めることが妥当なのだろうか、講舎の存続を懸念する時にその解答は不明である。

第3章 昭和の終焉から平成へ、講舎存続模索の時代（1984 年～2004 年）

戦後再興の明誠舎活動は、40 年に及ぶ歳月の間、月例会などを中心に着実な歩みを続けた。しかしながら、活動の中核を担ってきた竹中靖一がやむなく舞台から去り戦後復興第 1 期講舎活動の終焉を迎えることになるのは 1984 年であった。298 回例会（1984 年 12

月)を終え間もなく、竹中靖一は勤務先大学構内で倒れた。竹中の明誠舎活動への不在は、例会活動の企画、講師など一人何役も務めていた事から直ちに活動の凍結に結び付き、そのままで数か月経過した。

突発的な事態を迎え、「明誠舎」去就の選択・決定権を担う任にあたる事になったのは、竹中靖一の余生の後見的支援者として生活のすべてを移譲されることになった娘である筆者中尾敦子(竹中靖一次女)と連れ合いの中尾正であった。竹中靖一の生活拠点(住まい)移転に伴い、様々な分野の店じまい(終活作業)に取り組み、可能な限りで竹中の余生を支援する方向に動き出した。拠点となる住まいの転居、それに伴う竹中の住居地に登録されていた明誠舎事務局と諸所の去就を決断することが迫られた。従来からの運営を知るために、法人組織の実態調査や事業分析に急ぎ取り組むことになった一方で、それらの結果が出るまでも、社団法人心学明誠舎の継承者(代表:理事長)を探す作業に取りかかった。筆者の連れ合いである中尾が、公益的組織の移譲作業に取り組むには、あまりにもその世界の門外漢で、戸惑う事や不明な事ばかりが浮上してきた。打開策、収束策、閉鎖策などの解決策を選択するにも、急ぐにはあまりにも多くの関門が目前にあることだけを知ることになり、惑う日々でしかなかった。葛藤と模索の中で法人をなぜ再開していったかの過程を記録に沿い整理しておく。

第1節 法人組織の現状と実態(法的組織と運営実態の検証)

2代目理事長として重任してきた竹田義蔵の逝去後(昭和56年7月)、理事長職変更手続きは法務局登録未提出のままであった。突然の竹中のアクシデントで、予告なしに休眠せざるをえなくなった講舎活動について、法人理事たちと個別の協議を幾度か重ねた。加え、これまでに明誠舎とかかわりのあった財界人や、心学に何かしら関係がある幾人かの研究者たち、くわえて恒常的に参加してきた舎員たちを訪ねた。そこにおいても、妥当な担い手が見つからないままに時間は過ぎるばかりであった。当時、心学の世界では門外漢であった筆者は、この事態の解決の糸口を見出す事は不可能という結論にいった。そこで、230年継続した心学明誠舎講舎の活動閉鎖を決断し、準備に取り掛かることとなった。

そのような折に、これまで講舎活動に参加されていた熱心な舎員数人が、自宅療養中の竹中の見舞いを兼ねて幾度となく自宅を訪ね、講舎の存続を懇請する姿に何度か遭遇した。彼らの熱意に満ちたあまりにも強い懇請の回数が重なった。その熱意と懇請の様子を見る筆者は、「学ぶ事」「知識を求める事」などに対する受講者たちの強い執念にただ驚きたじろぐばかりであった。筆者はこれまでに明誠舎にかかわりのある人、心学に関係する学識経験者などを訪問し、活動再開への支援を懇請した。活動の大切さや主旨には理解を得るが、事務局を抱え中核になり、現代の都講として、啓発なども含む心学講舎活動の担い手を受けようとする人は見出すことはできなかった。しかしながら竹中靖一の思い入れと、講舎活動へ受動的ではあるが熱心に参加してきた有志舎員の何度か続く懇請が、筆者の心の隙間に小さな火をつけることになった¹⁾。「社会的使命」「伝統の継承」などという根拠もない使命感や、親孝行という種火に火が燃え広がり、その火は日増しに大きなものになった。その種火が筆者の安物でかつ、まがい物に近い義侠心をあおることになるのに時間は要しなかった。いささかなりとも心学に関する学びや社団法人などについての知識などを重ねた現在なら、この時の心境などを的確に言語化する手法を持ち合わせたであろう。

当時の筆者の心境は「道は無為にして、しかも為さざるは為し」と示されたと受けて、「人生は出たところ勝負行ってみなけりゃわからない・・・」など知る限りの先人の啓示を頭の片隅に置きながら破れかぶれに次代の都講を探す行程に歩を進めた¹²。熱意ある舎員と、現役の理事、加え幾人かの竹中に関係する学識経験者の協力を得ることができ、筆者中尾が暫時的に法人事務を引き受けることで再開が決断された。あくまでも緊急避難的な処置であり、全くの門外漢でもある筆者とその連れ合いは、暫時的な運営に携わり引き受け手が見つかるまで続ける方向に進路が定まった。1986 年（昭和 61 年）、監督官庁である文科省、法務局、理事、関連有識者などとの幾度かの折衝を終え、8 月に総会を招集、理事体制を再編し、秋から即座に活動が再開された¹³。所管部局である文部科学省や大阪法務局との折衝など、230 年を超え当舎に引き継がれていた資料の膨大な山との格闘がこの時点から筆者の責務となり明誠舎との関係がはじまった。

第 2 節 事務局再開の選択と課題

1985 年から 90 年は既にバブル景気が終焉し、バブル崩壊の 90 年代、日本経済の成長は停滞し「失われた 10 年」といわれた時代を迎えていた。企業はこぞって経営を維持するために経費節減に取り組み、当社にもその余波が及び、住友系列の法人舎員辞退が続いた。竹中が家内商店的な手法で継続し続けた講舎活動を引き継ぎ、諸処の事情を越え再開に踏み切った時に、筆者は以後に再度生じるであろう講舎活動の行き詰まりなど先の見通しを考えるゆとりもないままであった。これ以後約 20 年間「心学明誠舎」と筆者との格闘が始まったが、竹中の停滞に至る過程を再生産していくなど想定もしないままに毎月の日常行事として講座提供を重ねた。この時代を記すには幾分私的感情や私的視座におちいる事を避けがたいが、講舎活動提供の実質的な主体者として現代の心学都講役割を担ってきた当事者である。許される範囲で、また可能な限りに客観的に状況を記す事に努めたいが、この稿を起こすに当たり課題であり、避けつづけた命題である「法人活動としての私塾運営」という筆者自身の問題関心を置き去りにしたままで継続している講舎の活動を検証していく事を本稿で試みたい。筆者の 20 年間の都講としての活動を顧みると、既受講者たちの熱い思いで呼び覚まされて就任して以来、講舎活動継続と、市井の私塾の歴史伝承という大義に覆われたバトン走者として、時間に追い回され、定期活動に走り続けた先代事務局主宰竹中の講舎活動の再生産そのままである。いやそれ以上に悪い状況であることは、都講竹中靖一のような心学者でもなく、優れた研究者でもない事で致命的な状況へと転がり始めていた。

第 3 節 再開した講舎活動

この時期の講舎活動は筆者の研究ノート¹⁴にまとめているので、詳細は割愛したい。本章は、研究ノートで活動を①活動休眠期間（1984～1986 年）、②再開第 1 期（暫時的な活動再開期）、③研究者ネットワーク運営期、④大阪府立文化情報センターとの蜜月期、の 4 期に分けたのに沿いながら、特に②と③の時期を中心に、活動内容、講舎をとりまく大阪の社会教育行政の諸相を概観したい。年代を追って講舎を取り巻く時代背景などを先稿に補完し、特に都講として明誠舎に携わった人々を主軸に筆者の所感を添えて、この章をまとめる。

再開第1期（暫時的な活動再開期）

1986年8月暫時的かつ促成的な再開事務でさぐり講舎活動が再開された。時代は、オイルショックに端を発し、バブル景気からバブル崩壊へと日本経済が目まぐるしく動いた時代であった。事務局であり、心学普及の中心であった竹中靖一を失った心学明誠舎は、舎員の篤い懇請と研究者たちの応援で、1986年8月23日に総会が開催され、直後から講舎活動再開を果たした。

再興の総会記録に明かであるが、庶務などマネジメントを取り仕切る事務局の任を中尾正が引き受けた。これまでの講舎活動である例会との違いがいくつか見受けられた。①受講者から参加費を徴収する、②参加舎員が当日の庶務を担当するなど、参加者へ参画意識を促す方向へ切り替えようとされた¹⁵。この発想は市民が自らの学びを得るには、受け手としてだけでなく、何らかの形で参加・参画していく意識を持ち、学びの主体へ一歩近いたのではないだろうか。心学講舎は、石田梅岩の開講以来、講釈（学びの場）はだれにでも無償で提供され、申し込みなどなく随時学ぶ機会を得ることができたが、受益者自身が受益するという行為に対し、費用を払うという受益者負担となった。カルチャーセンターなどをはじめ、この時代に市民に多様な学習機会を提供していた市場に比しては破格の廉価ではあった。学ぶことに対して学ぶ当事者が金銭を支払い、提供者は講座運営の対価として金銭を受領するという大きな方向転換でもあった。

活動の取り決めを概ね次のように決め、下記のような骨格で運営された。

- 例会は年間6回、(休会前は10回/年、8.12月休会、会場未定・・変動あり)
- 例会内容は各分野専門的研究者が、最新の研究成果を自由に、平易に話す企画
- 例会名称は「心学の会」と変更、心学に特化した内容に限定されない。

高等教育研究機関である大学、NPO、NGOなどの市民グループ、自治体が生涯教育の機会を提供することなどがまだまだ少ない時代であった。人々は学ぶことに渴望し、会場が移動しても、講師が恒常的でなくとも、天候など外的状況には左右されないで会場に足を運び、次の会の開催が心待ちにされていた。講座の内容を振り返れば、緩やかなつながりで学会、研究会などに固執されない人と人との関係、多様な視点からの講師選択、卓越した専門家が主導していない組織であり、泡沫的でもあるような学びの場の存在が効果的であったとも考えられる。現在多くの市民活動が展開されているが、細く深く関心事や課題を抽出し、専門的ともいわれるほど目的を特化していく活動の機会が多くなっているように思える。生涯学習という学びの場は専門性を特化するのか、広く浅く多様な視点から多様な目的に向かう事ですべての人に開いていくのか。多様な学びの機会があればあるほど、人は迷いの中で自己の選択を消化しきれないようにも考えられる。戦後第1期の明誠舎例会とは講座テーマだけでも趣が異なったが、明誠舎講舎活動を模索しながら継続していた活動の様相が反映されている。講舎活動の意義や役目を模索、混迷を解きあかす鍵の一つとなりえないだろうか。

社会はますます経済の沈滞期を迎え、運営資金提供者で企業からの法人舎員辞退の申し出が次々と届いた。資金面から法人運営はいよいよ危機を迎え始め、加え再開直後に理事長に就任した加地伸行大阪大学教授からの辞任申し出で、社団法人としての再構築がせまられたのは再開後2年に満たない1988年（昭和63年）であった。10月例会「心学の会運営について」と題した例会兼総会案内が舎員へ送付された。（1988年9月22日付）2年間

代行の約束をし、ほぼ任期満了を迎えるに当たり、運営について総会で趣旨を説明、その任を辞任したいという下記のような文面があらかじめ舎員全員に送付された。会の運営については、財政面と学芸面との両面があり、加地伸行は専ら学芸面を担当してきた経緯を記し、更に辞任に至る 5 つの理由を明記している。

- ①心学に対して、学問的関心は抱いているが、心学普及には関心がないこと。このことでは竹中の遺志とは相違を感じており、心学の普及という実践的活動に適した方が良いと考える事
- ②関心が心学をめぐる学問的関心であるために、「心学の会」の講演内容が、いわゆる教養的講座内容となり、これでは世の文化講座と大差がないのではないか
- ③依頼講師は氏の知己・友人を中心としている、一度は依頼できても 2 度目の依頼は困難でもあり、講師計画に苦勞している事
- ④講師を依頼すると、当日は可能な限り出席しないといけないが、多忙もあり十分でなく、講師に対して失礼をしている事が不本意である事
- ⑤「心学の会」の開催に対して新聞の催し案内に掲載依頼するにもエネルギーを要し、掲載されない事もある。翻って会員増加が困難でもある事

以上 5 項目の主旨に加え、財政面で問題が大きいことも指摘している。加地伸行と中尾正が企業などに財政援助を何度も訴えたがさしたる効果はなく、企業援助は期待薄、会員増加も困難で財政面では悲観的であると言及している。運営についての課題は明確化した、解決に向かうには理事、舎員の潜在力は皆無に近く、筆者にとっても解決不可能な事象に陽が当たるだけで講舎は再度の混迷期を迎えることになった。加地の所信を記し発信した文末に、明誠舎の現況について次のようにまとめ理事長辞任の意思をのべている。「60 数人の舎員の存在、年間 30 数万の会費収入に重ね、会の歴史と伝統がある事などからも、この組織を誰かに背負っていただきたい」

この書面から現代心学講舎活動における都講としての資質や要求課題をまとめてみたい。市民活動組織として心学の思想の普及を行うのか、研究成果を発表していく活動であるのか？心学をより多くの人々に知ってもらうためには、活動を広げることであるのか、深める事であるのかなど日常的講舎運営の方向決定と実施には深いかかわりが不可欠であるのだろう。それは換言すれば、法人舎員拡大、提供講座の企画、会場確保、加え情報発信などだけでなく、心学明誠舎の看板でもある理事の役目に要求されるのであろうか。それらすべての条件が要求されて、講舎活動の骨格となる強い使命感などを持ちながらの任は、片手間仕事とでは不可能かもしれない。社会貢献とは一面的には奉仕活動であり、社会的な認知度を増幅するだけでなく、もちろん金銭供出をするだけでなく、時間や人との関係性などを開拓し、紡ぎ、それを惜しみなく組織活動（法人）に無償で提供することが要求されるのだろう。

心学発祥地である京都「心学明倫舎」には心学道話の柴田鳩翁の子孫でかつ研究者でもある柴田実、大阪「心学明誠舎」には竹中靖一などが存在しそれぞれの立場から心学研究と市民への普及活動の中核を担う理事たちが多彩に存在していた。優れた個人的な力だけで継続し伝承していく事には限界があった。卓越した都講たちが消えて、各地の講舎は、運営原資を活用し発展に残りをかけて活動手法を展開していくか、そのままに休眠状態を持続するかが迫られていた。無償の社会貢献活動に汗を流す事、時間と資材を提供で

きる人材を見つける事が不可欠となる。社団法人の資金拠出元である法人舎員という冠をつけた財政面からの支援者は撤退する一方、新規参入見込みのない世間は「失われた 10 年」という時代であった。反面で、企業の CSR が大きくクローズアップされだして、社会的企業の時代への転換期を迎えていた。

研究者ネットワーク運営期

船場という風土で学齢期を過ごし、幼馴染や学友には戦前からの伝統に生きる多様な老舗の跡継、縁者たちが多数いた。その地では、学制の施行された明治初期に彼や彼女の祖先船場商人たちが住区に小学校を作り地域財産として寄贈し育んできた。大阪の中心部に位置する「船場」では戦災の痛手にめげず早くから復興の兆しが見え、往時の街へと活気に満ちていた。そのような街で、筆者は学齢期の小学校から高校に至るまで学友、その家族縁者たちと時間・場所・空気を共有しながら過ごしてきた。生活拠点である住まいは都心から離れた住宅街にあったが、父の生家は船場、家業は浄瑠璃本の版元という船場商人¹⁶の末裔であり、父の影響もあったと思える。

明誠舎を担ぎ先行きが見えなくなっていたこの時期、たまたま同窓会の席で幼馴染の少彦名神社¹⁷宮司別所俊顕に出会い、明誠舎の窮地や現状を語ると間髪をいれずに、彼から戻ったのは次のような言葉であった。「伝統や歴史は、捨てれば二度とは戻らない。船場で生まれ育った心学明誠舎という伝統の継承だけでなく、竹中先生の偉業だけでもなく、長年をかけ継承されてきた伝統を守り伝えていくのが子孫の役目ではないのか」と筆者を叱咤激励し、同時に消極的手法で応援する事を即座に申し出た。再興を祈念し竹中のもとを訪ねた舎員たちと同じく、ここでも伝統を守る事と心学講舎を絶やさないと語る一人の市民に遭遇した。説明も懇請もしない筆者の、愚痴のような会話へのリスポンスであった。期待もしないで幼馴染に聞いてもらっただけから想定外の出来事であった。別所は「自分のできる応援は、船場に存在する神社宮司としての職業的な名前だけしか持ち合わせない。理事長としての実務、心学の普及、学際的な対応などの役目は果たせない……。平常の活動に沿うように細やかな動きはできないが……」そして「社団法人に理事長が不在では登録も成り立たないだろう」と理事長就任を引き受ける事を約束した。爾来、別所俊顕は 21 世紀の法人再編成までのおよそ 20 年間（1985～2003 年）にわたりその約束を果たし、新しい形の都講として責務を全うした。このような経緯で、法人の形式は再編成され、再興の動きが加速された。

回数を重ねていく中で、数少ない私設応援団のような存在が、講舎存続の希望につながる諸事を寄せ、その心配り手助けなどに講舎をささえる小さな予兆も感じられる機会に出会う事があった。それは、梅岩の初講時にまた、それ以後にも梅岩の個人的生活を支えただろう記録にのこっていない裏方の人々の存在に思いをはせる事になり、筆者自身が講舎存続へむけて意識変革をするトレーニング時代となっていた。

毎回の例会だけでなく、文科省職員の対応や例会講師の送迎、記録の保管など、一人事務局に惜しみなく応援を提供された人々が存在していた。その一人は筆者の連れ合い中尾、かれは本業の傍らに公的書類作成、点検、文科省などとの折衝の中心としても寸暇を惜しまず対処した。また、後日監事として名を連ねた一人の熱心な舎員が、毎回の例会の講座記録（録音テープ所蔵）と講座案内チラシ集などを保管してきた。彼は、後世のため、講

舎活動の研究資料として書類を筆者の元に寄託。裏方の一人として常に事務局に寄り添い手を貸し、ほぼ毎回参加、受付なども含め雑務をこなした。混迷期の都講、名は安部亮介¹⁸であった。講舎活動企画・講師交渉などを担ったのは日本近世史学会などに所属する研究者たちで、その役目は多岐であり、隔月に設定される例会の講師選任、交渉、会場確保、例会当日の講師対応や進行、そして演題や内容の選択など時間と労力を提供し続けてきた。大阪府との共催開催を実現するという公益性的な活動形態の基盤を構築した。加え、研究者間のネットワークをつなぎ、引き込み講座づくりや講座アドヴァイスだけでなく講師交渉などに尽力した。後に理事として名を連ねたが、早逝の小堀一正はその名前を法人の記録に残さなかったが、この期間の半数以上の企画などを山中浩之と共にになった。この時代は研究者ネットワークの支援で講舎活動は社会的認知と高い評価を獲得していった。新しい参加者が毎回少しずつ頭われていた。講座は心学に特化しなかったが心学に関連し、心学の活躍した時代の諸相を知る事が出来、学際的にも先駆的研究をするナビ講座ともなるような専門性が高い講座提供となっていた。企画者側に立ち、惜しみなく時間や、知識、人脈などを提供された人々はこの時代の都講として混迷期の講舎を支えた人たちである。中心で活躍された山中浩之、小堀一正、辻本雅史、桂島宣弘の諸氏の名をこの期の都講として記録に残して置きたい。彼らの人脈に沿い、講演リストに載る多くの研究者たちもまた存続の不安にあった巷間の学びの場「心学明誠舎」に出向き、個人の知的財産でもある研究の一部を惜しげなく披露された事を記し、民間私塾「心学明誠舎」を残すことに貢献された事で現在にバトンが繋がっている。

第 4 章 講舎発祥地における企業家ネットの都講たちにバトンを委ねて

平成を迎え「失われた 10 年」という時代を迎える。講舎の財政はいよいよ逼迫し、日本経済もバブル崩壊、多くの企業は経営の見直しを図りこぞって経費節減に動き出した。法人舎員の在阪大手企業各社からの法人舎員辞退を伝える連絡が次々と担当者（主として企業総務担当）から届いた。講舎に残された個人の寄付金だけでの運営は間に合わず、先代事務局を担った竹中靖一の個人遺産からの補完、筆者が個人的に補うという事でかろうじて事務局が継続された。財政面での困難な事務局の事情は、それだけでなく政府の方針でもある社団法人組織の整理が実行される時期を迎えていた。「明誠舎」監督官庁である文部科学省の見直しに対する厳しい指導が隔年に実施された。

この時期になり、心学講舎を維持するのに名を記録に遺していない人々、換言すれば町の都講たち、庶民の学びを支え続けてきた人々の存在が筆者の研究関心につながるようになっていった。皮肉にもその時期は、講舎滅亡に向け自滅、自己崩壊などというそれまでの筆者の思いは徐々に消失し、組織維持の社会的使命の意味などが認識された。講舎消滅はいけないと考える一方、組織を維持することの難しさを従来以上に感じながら、心身の疲弊で事務局を一人で取り仕切る筆者が力をそげば講舎は崩壊寸前という状況にあった。模索の中、委ねるに適した人材、組織を探しあぐねた最後の到達は、明誠舎発祥地の「船場」近在で、堅実でかつ発展を見越す事の出来る企業オーナーを探すことに至った。このような企業経営者の幾人かを探し出し、起死回生へ向かった。残念ながらこの時期でさえ、筆者の専門性のある心学への造詣は乏しいままで、促成栽培のままの心学の歴史認識が唯一の後ろ盾であった。そのような知識の中で、心学明誠舎の歴史を紐解くと、どの時代に

においても民間私塾が生き残ってきた根底に、必ず幾人かの船場の旦那、船場商人といわれるような懐の大きな人物が登場している事を認識していた。明誠舎通史、沿革歴には名を見いだせないが、明誠舎を支える力となった多くの船場商人の人脈や財力が 280 年の歴史を継続させていることを改めて認識していった。それは現在、企業の社会貢献、企業 CSR と読み替えて語られることになるのであろう。経済学の領域の知見、社会学的な視点で論じるにはその学識経験の不足を、感性で補い対峙していた。その根底には、幼少期から筆者が「船場」で学齢期を過ごし、祖先からの船場町人の DNA が体内化されていたとも思える。船場の地で活躍する、また活躍してきた経済人の末裔などの交流も多い事からのセンサーは「Yes You go」と羅針盤の方向を船場へと舵を切らせた。2003 年(平成 15 年)辰野株式会社辰野幸正副社長が全面的支援を引き受ける事に了解を得て、約束が取りかわされた。

それ以後即座に、社団法人の実情を見直し、法的な取り決めに沿う条件を満たす移行処置が取り組まれた。その事務処理の煩雑さや粗雑さなどは、辰野から派遣された担当者に愛想を尽かせるような状況であり、新体制の明誠舎が始動するにはしばらくの時間を要した。企業スキルを持つ事務担当、庶務担当者が専従で対応、機能不全の公益法人が 21 世紀の公益組織に組織を整えるには予想を超えた早さでなされた。都講として明誠舎通史に新たに登場した辰野幸正¹⁹⁾は、それまでの企業経営の傍ら、船場の地で育てきた企業人ネットワーク²⁰⁾を主軸に構想を描いていった。企業スキルを活かした事務処理は公益的団体の組織再編や法的登録事務、会計処理や予算作成などを迅速に進めた。筆者の移譲にさいしての唯一の条件は、すべての移譲を済ませた時点で明誠舎事務局との個人的なかかわりを辞退する事であった。辰野の引き受けの条件の一つとして筆者に示されたのは終身、何らかの形で法人にかかわりを持つ事が提示され、企業メリットのない沈没寸前の法人移譲引き換え達成を進める見返りとして、辰野からの条件を受けその約束を果たすことになり、明誠舎とのかかわりの終幕を迎える予定が頓挫、明誠舎と筆者の関係は以後も継続することになった。しかし、運営業務などから解放され、爾後の「心学講舎明誠舎」との関係は、講舎活動における学習提供や社会教育活動、当事者性も加え自己査察の手法も重ねて、活動をまとめることに責務を置きかえた。30 年に及ぶ年月の間、心学への目線が変化していく筆者、私を掌中に研究対象の一つとし、講舎を見続けていく事に決断し、先に竹中が上梓した『明誠舎沿革略』続編として本稿に取り組み、昭和から平成へ講舎をつないだ都講たちを主役に以後の通史のまとめに取り組むことにした。

<移譲の経緯とその過程を追う>

戦後社会の財閥解体で、個人事業主が少なくなり、企業の利益が優先される経済活動を迎え、直接的に目に見える利益を生じない社会貢献活動を支える個人の出現は稀有になった。そこで、戦後再興した明誠舎などは、経営母体の財力を集積することが困難でおのずから家内営業的な運営を強いられていた。強力な力とネットワークを持つ個人の私的事情に左右され、存続の危機がどこの講舎にも出現してきたと考えられる。このような歴史の繰り返しや、他団体に見受けられる歴史から、大きな財力を期待できずとも、財力を持ちあわせたり、財力使用の強い権限を持ち合わせる幾人かがネットワークする事で大きな力を発揮できることは明白である。その時、ネットワークのキーマンは個人的な名誉や地位

より、社会的な役割を自覚し直接的な利益を享受するためでない活動(CSR)を理解し、本業の傍ら社会貢献をできる、言葉を変えればある意味でのお人よしという個人企業のオーナーの力が不可欠である。20 世紀後半に、海外からの思想といわれる企業メセナという言説が巷間で注目され久しい。しかし、浪速商人たちは長く続いた太平の徳川時代にもすでに、文化や教育という形に見えないものに対して、強い思い入れで財力や時間を使い影響力を残してきた。今も綿々とその伝統が大阪の街中に残っている事を改めて確認できる歴史の流れを、法人移譲の過程で現実的に遭遇した。筆者は、それまでの社会体験の中で私塾として学びの原資となるものを提供する対象を模索することのみに視点を向けていた。支援する人々の個人の経営手法などを知らなくても、企業継続のための資力(財力と人脈)と手法などを知り、それらのものを所有する人々を見出し、コラボレーションしていく事で必然的に問題解決の突破口が存在する事にも気づいた。潜在的で、かつ継続性があり、自己の権勢欲や名誉欲を発火点にしないで、所有する原資を投資することのできる所有カテゴリーを見極めるといふ、重要でかつ至難な事でもある条件を見極めほんものの船場商人とつながることの必要性を再編成過程で知ることになった。条件をすべて満たす人を探すのではなく、各人材が所有する特質を繋ぐアドボカシーにもなり、換言すればキーマンを中核に据えてネットを組んでいく作業の必要性和困難さを知る学びであった。法人のすべてを移譲し、企業メセナとして進める事で話が進みこれまでの状況を変える希望を持つことができた。辰野本社所在地である、本町に事務所移転直後から、再編成には専従の人材が配置され、企業ノウハウを生かされ加速的に見直しが進み、動き出した。竹中没後 20 年、暫時的な組織運営で進められた社団法人を公益団体としての形式に戻すための膨大な事務処理が必要であった。辰野(株)の退職したスペシャリストが専任でその役に任じられ、企業人としての蓄積されたスキルはいかなく発揮、再出発への準備は加速度的に進展した。事務局として、辰野の秘書が任じられ、企業で培われた総務的スキルが惜しみなく発揮され、移転準備は着々と進行した。企業CSRの姿が筆者の眼前で展開され、長く幽閉状態であった心学講舎はどんどん社会化されて行く過程を観察し、背負い続けた重荷が日々解きほぐされる快感を享受でき、組織が家内工業から社会的組織へと姿を変えるのに長時間は必要とされなかった。

＜新組織誕生＞

理事長に財団法人大阪 21 世紀協会理事長堀井良殷、企業人ネットからは辰野幸正が副理事長、他に少彦名神社宮司別所俊顕も理事として重任、研究職・有識者としては大阪大学名誉教授作道洋太郎が監事とし任に就いた。低迷期に舎員となり、熱心な受講者でかつボランティア事務局サポーターであった安部亮介も監事として就任した。中尾は事務局長、理事に、事務局担当者として辰野(株)社長秘書が任じられ、その卓越した事務スキルがいかされ、体制は迅速に整備され、舎員管理、講座企画、講師選択、交渉、法人舎員管理などを担う何本ものバトンは、細分化されそれぞれの立場の人に委ねられて、動き出した。経済界でめざましい活動をする人たちを中核に、方向性や心学への知見豊富で、示唆のできる心学にかかわり深い研究者たちの力が加わり、そこに拠る学び続ける市民たちを繋ぎ、「明誠舎」発祥地へ戻る基盤は再構築された。

第5章 新たな企業家たちがささえる「一般社団法人心学明誠舎」

新しい事務局は辰野の企業としての事務処理能力が生かされ、緩やかであるが堅実に基盤整理を進めた。これまでにない多種の企業とのつながりを紡ぎながら進展していった。しかしながら、再興の期待に満ちた時期は長くは続かなかった。講舎継承の中核都講の役割を担って動きだした辰野幸正の突然の逝去というアクシデントが2006年年末に発生、またも急な変革が迫られることになった。懸案であった家内商店の組織運営から脱却し、企業という経営能力のある組織型運営が始まりつつあったのはあまりにも短時間で、軌道に乗るまでもなく新たな変革が迫られることになった。幸いにも、これまでの家内商店的運営委を脱出しつつあった事から、以前に生じたアクシデント遭遇時とは異なり、法人組織運営が始まっていた事で早急な対処の手立てが熟慮され、再度の組織構築がもくろまれた。

第6章 考察

第1節 「心学明誠舎」活動を伝えていく・・・「学びの場」としての課題

明誠舎と同じく維新後も盛況を呈した東京の心学講舎に所属していたいくつかの所蔵品などは心学講舎の行方が分からなくなったと同時に消え、今どこに所蔵されているのであろうか。2000年以後、東京の講舎活動が停止し、音沙汰もないだけでなくすべての有形無形の心学関連物が講舎共に姿を消している。公益的な文化財、歴史遺産として先人たちから受け継いだと認識しないで講舎に係る都講たちが自己だけの権勢欲や名誉欲などで活動を重ね、運営を誘導し、挙句が引き継いだ講舎財産や資産などとともに行く方知れずになっている。講舎の自己崩壊だけでなく、財産や運営などに関する金銭的トラブルを引き起こして最終的には刑事訴訟事件にまで至った至近な出来事を見聞きし、明誠舎にとりこのような事件は他山の石ではない。最近の心学講舎に関連した事件の警鐘から、現代の心学講舎での都講の役割はどうあるべきなのか、卑近な場所で仲間内ともいわれるつながりのあった講舎の結末に何を学ぶべきであるのか。それにはあまりにも重すぎる出来事に接し、現代、そして未来の心学講舎の姿を模索しながら、現在も講舎に名を連ねる都講＝理事＝事務局の役目を模索するが、その答えはいまだ見つからない。江戸期から、心学発生地京都で全国講舎活動の元締ともいわれ、維新後も活動を重ね存続してきた講舎に目を向けると、現存する理事長宅にはたくさんの歴史遺産が残されていると聞く。しかし、今は都講として講舎維持、や心学普及活動に力を向ける人々の姿はなく、講舎は凍結、そこに所蔵されている遺産が学術研究の場に登場する機会や、市民が出会う機会も稀である。歴史遺産が散逸せず、そのまま眠れる遺産としてそこにとどまり続けることができるのであろうか。現代に残り残ってきた講舎、所属する歴史の伝承などを、単一講舎が死守できるのであろうか。心学という日本独自の思想を生み出した背景を学ぶものたちが、大きな視点から現存する心学講舎伝承方法を模索できないだろうか。想定外の出来事からはじまり「心学講舎」の歴史に深く入りこまざるを得ない機会に遭遇し、そこに人生の半分の歳月や多くの時間を注がざるを得なかった筆者の個人の力ではその答えを見つけれられない、過大な宿題である。社会教育史、近世史の研究分野だけでなく、経済活動の中から現代人の生涯学習をまなぶ分野などで活かされる日本固有の歴史遺産心学として伝承する方法や、学びなおすために活用される有形遺産として共有できることを期待したい。明治維新をкаろうじて生き残った他講舎の歴史から、現在の明誠舎が学ぶ事は多いと考える。講舎の遺産は保存

はもちろん、次世代への伝承、そして研究などへの活用など早急な対策を講じる事は今も講舎活動を重ねている明誠舎一つの課題であり、社会貢献としての使命を背負わされていると考える。明誠舎という一つの講舎だけでなく、他所でも活動が継続しているなら、このことは現代の都講に課せられた共通の課題と考えたい。歴史遺産として、心学講舎に託される不可避の役割で、かつ重要な課題と管見する。この視点から、現在に生きる心学都講の使命と活動課題の一つが明確化すると考える。

現在の心学講舎活動において、都講役目を担い啓蒙活動に積極的に携わるという事は、理事という肩書を携え、講舎の行動規範を決める役目を担うためであろうか。梅岩が講釈を初期に希求し続けた思いと比較し、心学というカテゴリーを形成してしまった後発の心学者と都講たちへ複雑な思いを抱くのは私の個人的なセンチメンタリズムに過ぎないのであろうか。ノーベル賞作家アレクシエビッチの言を借り、私の個人的心痛を代弁してみたい。「他者の底知れぬ苦悩の淵に勇気を奮い起こして飛び込むのはとても怖い・・・」さらに、「・・・問題や権力を守る事だけに専念し、人は歴史の中に消えていくのです。だからこそ、個々の人間の記憶を残すことが大切なのです」²¹、彼女の書物はチェルノブイリ事故の証言を獲ながら書かれた書物である。

現在、明誠舎で理事としてかかわる人々は東京の講舎自滅経緯を深く知らない。また知る必要もないのであろう。自舎の存続を模索し、都講役割をそれぞれが、それぞれの多様なスタンスで任じていると確信する。が、このような先哲を再生産していく事もまたありうる。現在の明誠舎には正味財産、舎屋もなく、少ない文化遺産としての書物のみである事が幸いしている。21 世紀における都講役割について、心学を語るのと同じように吟味し進むことで 300 年近い講舎の継承が確立すると考えたい。その哲学を語るには浅学で、心学論を有さないもどかしさもあり、苦悩と苦悶を梅岩や父竹中に問いかけてしまう。逃げたい心学の世界、幼少期から仕方なしに門前の小僧として育ち、講舎間のネットワークも体で知る筆者には、この事件に驚き、他者以上に不安な思いを懷いてしまうという皮肉な結果である。筆者のあまりにも感性的な所見に過ぎないかもしれないが、2000 年大会の、Robaert N, Bellah の講演要旨冒頭²²で、「石田梅岩は自分の名声や財産よりも道を探すことに専心する姿に重点を置きます」と始め「日本においてよい社会を探し求め、その上で心学はまだ発言権があると思います」と結んでいることに照らして査察してみたい。

第 2 節 時代変遷の中で、「心学」が伝えていく事、講舎活動「都講」の役割

講舎活動の中核にいる人「都講」が、下心、名誉欲、功名心など不穏当な思いを抱き、自己満足や名誉のために講舎につどう、または携わる人々が出没し、石田梅岩や彼の思想などを自己の行動の後盾にしているように見えてしまうのは、筆者の偏った思いだけであるのだろうか。石田梅岩の所期の試みである掛け値なしでの啓蒙や学びの共有、加えそれらの精神に沿って心学の思想を守りながら弟子たちが数々の講舎舎中と重ねた社会貢献活動の歴史を読みかえし、その時代の人々の心の有り様を模索して見る。失われた過去の心学講舎の栄光を追いかけるのではなく、現代に生かされる心学講舎活動とは、どんな姿になるのであろうか。梅岩の活動の歴史や生きざまと、心学講舎を運営する現代人や、心学という匂いの周辺にたむろする現代人に梅岩の思想との乖離を見いだしてしまうのは筆者の学びの不足なのであろうか。これらが、筆者の幻想で、筆者の心学への知識、歴史認

識、思想の理解不足などに起因することであるのか。論理的な提示や普遍性のある理論でもって論議する力を持ち合わせない事が残念である。昨今の企業経営の先導者である人々が、自己の企業推進のアリバイのように、または企業推進のスキルに「精練の経営思想」や「東洋的経営思想」という言説で理論武装していき、経済活動や市民活動で安易に使われているのではないだろうか。「心学」「もったいない」「儉約」「勤勉」「正直」などの語彙が心学の真髄として一人歩きしていく気配が講舎活動においても、十分な深遠な思想としての理解を越えて、ロゴのように充満してはいないだろうか。その真髄が多くのの人々に伝わり、深く理解され、一人一人の思想の中でその人自身のものとして生き、根ざしているだろうか。21世紀の心学講舎活動だけでなく、石田梅岩の思想や行為を読み解き、多くの人々の心に届ける行為でもある普及活動とする事業の在り方を再度構築してこそ、今に生きる石田梅岩を知ることができ、安易な普及は心学の伝統を継続する事の阻害要因になりかねないと推察している。常時横に鎮座していた「心学」「石田梅岩」は、新しい時代を渴望する成長期には反面教師にしか見えなかった筆者であった。その筆者は今も講舎奥の院に鎮座し、心学の伝統継承者の困難さを語り続けるロールモデルである。生育期から身近にある心学を振り返り、心学と私、心学と現代社会の関係を問い続ける自己学習の到達点は見えない。

第7章 結びに変えて

資本主義の在り方が問われる現在、東洋の経済思想としてドラッグーと比して登場してくるのが石田梅岩といっても過言ではないだろう。筆者も多くの場面で、心学という言葉が闊歩していることに多々めぐり合うことがある。石田梅岩や、心学について、は主に儒学に比較した思想史や教育史などの分野においては先行研究も残されているが、過去も、現在も研究者の数はきわめて少ないように管見する。それは、石田梅岩自身の目指した「学び」には系統的な伝承者があるわけでもなく、著書など文字による記録は彼自身の目指した学びのあり方からも望むものではなく、口伝での講釈などは録画など記録の手法がない時代であり残す機会がなく、少ない事も当然と考えられる。梅岩以後に、心学を普及し、体系づけた弟子たちは、心学に特異な道話をはじめ施本など様々な形式のものを残してきたので、それについては論ぜられる機会も多い。文字を媒体にした学びの世界から、語りの手を借りて学ぶ世界へと移行した時代に心学の伝承力は成果を発揮したと思える。時代の流れを変えるかのように、学びの世界を凌駕する新しいスキルを活用して、心学普及に力を発揮した事が多くの心学を学ぶ、また意図せずして日常の暮らしの中で心学の思想に触れる事が可能になり著しい普及が及んだと考えられる。

現在、情報の伝搬がITなどソーシャルメディアの力でなされる時代を迎えて、どのように心学を伝えていくのか課題は大きいと考える。そのような時代を迎え、講舎「明誠舎」存続に新たな都講を求める意味はどこにあるのか。心学を普及させることが講舎活動の本筋で、重要な目的に置くのか。歴史遺産の一つとして、江戸時代から継承された生涯学習私塾活動の継続に重点を置き、心学に特化せず町の産み育てた私塾の歴史的意義を伝承していくのか。この筆者の問いかけに、心学研究の先行研究から解を見つけることは難しい。昨今の学際的心学研究論者は少ないとされる中で、優れた少壮の研究者の一人である高野秀晴²³は、これまでのほとんどの心学研究を見る限り、心学を研究する事と心学を普及す

ることとは切り離し得ない関係にあり、戦後の研究は心学の今日的意味を模索する営みである事などを論じている。翻れば、心学を普及させる事にも衰退させることにもつながらない心学研究を行うのは困難とみなすべきであるとし模索が重ねられている。

教育という枠組みを超えて、社会の中で伝承し変えてはならない事と、変えていく事などの選択の困難さ、自主管理や自己決定が要求される現在の生活においてはあらゆる差別や人権意識を越えて歴史の伝承の在り方とつながるのではないだろうか。このような視点から考察すると、筆者の初期の社会教育学習課題であった「ジェンダーの視点での学び」につながる未解決課題の紐解きとつながる事に気づかされ、更なる研鑽・再考を重ねていく事にしたい。

「心学明誠舎通史&竹中靖一遺稿集」編纂論考構想の研究ノートからの抜粋であり、本稿（未刊）の目次を添えておく。

目 次

はじめに

第1章 明誠舎（心学講舎）のはじまりから終戦前まで（江戸～1945年）

第2章 世界大戦を越え、復興の町で再興される心学講舎と活動（1945年～）

第1節 敗戦国の混乱からよみがえる講舎

第2節 例会内容について

第3節 組織運営の検証

その1 理事・事務所・会報・舎費など

その2 現存の有形資産は、なぜ戦火を免れたのか、その旅路をさぐる

第3章 昭和の終焉から平成へ、講舎存続模索の時代（1984年～2004年）

第1節 暫時的活動再開、さすらい続ける講舎活動

第2節 大阪府教育委員会文化情報センターとの関係を繋ぐ

第3節 他組織との連携事業

その1 大谷女子大学資料館心学関係特別展

その2 心学開講 270 年記念イベント

第4章 再建への模索期・船場に育まれた伝統と新しい企業人ネット（2004～

その1＜経緯＞

その2＜新組織の誕生＞

第5章 企業家グループの 支える『一般社団法人明誠舎』の現状

その1 辰野逝去による再構築

その2 他組織との連携

その3 例会内容について

第6章 考察

第1節 『心学明誠舎』活動を伝えていく・・・「学びの場」としての課題

第2節 時代変遷の中で、『心学』が伝えていく事と講舎活動「都講」の役割

第7章 結びに代えて

資料集 演題と講師など一覧・理事一覧・ほか

竹中靖一業績一覧

既発表論考抜き刷り

講演録&講演原稿など

企業向け心学啓発文

中尾敦子心学関係講演録抜粋

- 1 「心学明誠舎沿革略」(心学明誠舎刊)、『(社)心学明誠舎 HP』
- 2 落語など大衆芸能の中でも心学や心学道話に関係したことが日常に語られている。
- 3 小出檜重³エッセイ「下手もの漫談」の一節に 19 世紀末から 20 世紀にかけて、心学道場が小出檜重の懐かしい思い出として心の中に焼付いたとして登場し紹介される。ここに紹介される 19 世紀から 20 世紀の大阪の街のにぎわいは、先の戦争ですべて灰塵に記し消失したであろう。檜重のエッセイは幼少期(19 世紀末～20 世紀初頭)のことで、心学道場とは心学明誠舎、跡地には今も講舎跡の石碑(大阪市史などに掲載)が建てられ、現存する明誠舎の数少ない遺跡の一つである。「たった一つ、清潔な教育は施された。それは、心学道話だ。これは堺筋に道場があり、燭台と、燈心の光以外の燈火はなかった。床の間に忠孝の軸が懸かっていた。近所の医者とか知識ある者たちが、義勇的にここへ現れて、ためになる話をしてくれるのだ。忠臣蔵の話を連続的にうまく演じる人もあったと記憶する。何しろ、燈心の暗さが心を静めるのと、近所の人がぞろぞろとわけもなく集まるのがわけもなくうれしく、その上帰る時、岩おこしを一つずつ頂戴することが最後の希望でもあった。」(この道場は当時南区長堀橋筋 1 丁目にあった心学明誠舎をさし、明治 33 年(1900 年)『大阪営業案内』によれば、小出檜重の生家(葉種商)も同じ町内であった)
- 4 「日本を創った 12 人」第 7 章：堺屋太一著/PHP 文庫/2006 年
- 5 1993 年 10 月：大谷女子大学資料館便り『江戸期町人の商いと学び—明誠舎と丹波屋—』
- 6 『大阪春秋』第 72 号『丹波屋七兵衛家と明誠舎』山中浩之/『商経学叢書』第 8 巻第 2 号『由良家の家法書』竹中靖一
- 7 山田俊卿(1831～1921 年/大分佐伯藩医、軍医、弘濟院院長など/『大阪における社会福祉の歴史Ⅱ』大阪社会福祉史研究会編/2010 年大阪市社会福祉協議会刊、『山田俊卿伝』(社)心学明誠舎刊/竹中靖一編
- 8 明誠舎沿革略(心学明誠舎刊：昭和 50 年 4 月 17 日/第 200 回例会記念発刊)第 6 章
- 9 私家本：竹中靖一編集(19 年刊)
- 10 竹中靖一：明治 39 年大阪船場の浄瑠璃本版元『加島屋』に生まれる。
京都帝国大学経済学部卒業、同大学院、学部副手を経て退学。山口高等商業高校に赴任、教授。昭和 21 年 12 月同校依願免職、昭和 22 年有邦建設(株)取締役。昭和 24 年近畿大学教授、学部長などを歴任、昭和 58 年退職名誉教授、爾後非常勤講師。経済学博士、著書「石門心学の経済思想」ミネルバ書房(昭和の名著として復刻版あり)により昭和 39 年学士院賞受賞。(社)明誠舎理事、(社)石門心学会理事、(社)明倫舎理事、社会経済史学会・経営史学会評議員など、ほかに法隆寺信徒総代・文化財保護委員会委員など歴任。昭和 59 年近畿大学構内で倒れ、昭和 61 年逝去。著作・研究論文一覧は近畿大学『商経学集』などに所収
- 11 大阪春秋第 72 号/「大阪の女 50/『明誠舎主竹中靖一を語る/芳子夫人を訪ねて』」泉歌子記
- 12 この間の経緯は ⇒京都大学教育学部生涯教育学・図書館情報学研究第 3 号(2004 年)研究ノート「石門心学」活動の現在—生涯学習としての『心学明誠舎』活動小史—中尾敦子
- 13 大阪春秋第 72 号『今に生きる「安心」の哲学』おおさかの心学』小堀一正記「心学明誠舎の歩み」
- 14 京都大学生涯教育・図書館情報学 研究 2004 年第 3 号：『石門心学』活動の現在—生涯学習としての『心学明誠舎』活動小史—中尾敦子
- 15 暫時定款の変更を検討して行く事、舎費を年度会費制で舎員・賛助舎員・法人舎員にわたる。例会参加に舎員外からは受講料を徴収。運営委員会を設置する。定例会は原則 1 回/月にするなどが総会で決議承認された。舎員数約 50 名。
- 16 浄瑠璃本版元加島屋の屋号で昭和初期まで船場の地で店舗を構えた。参考資料：私家本『竹中家の始まり』所収、
- 17 少彦名神社⇒大阪船場葉関係企業発祥地道修町「葉のまち」として江戸期から栄えた道修町の葉種の神社と葉のかみさんを祭る神社。
- 18 社団法人「史学舎」理事長、エスペラント協会元会長など
- 19 辰野(株)副社長ほか多くの役職を歴任。
- 20 船場を基点にした多様な異業種連携の企業間ネットワーク(「せんば元気の会」「ニュービジネス協会」など)
- 21 アレクシエビッチ「チェルノブイリの祈り・自己処理作業者の妻の告白」(松本妙子訳)より転載
- 22 心学開講 270 年記念シンポジウム『取戻そう！日本人の忘れていた心と知恵～新しい資本主義と新しい個人主義～』ベラー氏講演要旨など

-
- ²³ 高野秀晴：『石門心学における教化統制力とその圏外—石川謙『石門心学史の研究』の再検討』2004年ペリカン社日本思想史懇話会編集＜季刊日本思想史：第65号＞ほか